幻となった武士新市街と国鉄遠佐線

佐呂間町の中に、今は全く市街としての面影がなくなってしまった市街があった。それは大正時代栄えた武士新市街のことである。

医者もいたと言ったら、佐呂間町開基百年目を迎えた現在誰もが驚くであろう。その場所は、現在の若佐小学校と、武士橋との間にあった市街のことである。

一丁目、二丁目、三丁目、四丁目と、道路で区切られて、佐呂間（元は鐺沸）区画割地図に整然と区切られた地図もある。

現在、その武士新市街の面影を記憶しているのは、年齢で言えば、七五歳位い以上の人かと思われる。この記事を書いている私は、大正一二年生れで、小学校入学が昭和五年だったから、そのころは、店屋が二軒と、鍛冶屋一軒、獣医一軒外土建の仕事する人の家が数戸、小学校の先生が空家を借りて通勤している状態であった。

業種だけ数えて見ても、床屋・大工・食料品（酒類含めて）・馬具屋・桶屋・センベイ焼き販売・雑貨屋・菓子屋・雑穀仲買・薬屋・豆腐屋・獣医・本屋・鍛冶屋・下駄屋・料理屋（兼売春）・お寺・寫真屋・宿屋・医者・神主・古物商・土木専業者・煙草屋・家畜商・種馬業（巡回）・鋳掛屋・蹄鉄屋・等で二八の業種があって、同業者重複含めると、

大正時代の武士新市街
そのころの武士橋
絵の一番向こうが小学校
市街の西側からの撮影写真
トレス

一時は三〇数戸あった。
これらの商人達も、四〇号線の栃木方面から、計呂地に通じる道路が完成したら、歯が抜けて行くように、過疎化してしまった。現在は元の新市街と言われていたところに、居住者は三戸になってしまっている。

国鉄遠佐線については、大正時代から昭和の始め頃にかけて、誘致運動が盛んに行なわれ、新市街地に駅の予定地も決め、仮測量の杭も打たれ、昭和二年には、盛大な祝賀会も行なわれたという。佐呂間の人達は、近くの国鉄駅と言ったら、現在の旭峠のトンネルのもっと上の方を通って、生田原の駅に行くか現在の丸山峠を越えて、留辺蘂の駅に行くしか方法のなかったころだから、遠軽から佐呂間に通じる鉄道が着いたらどれだけに便利がよくなるかと言うことで、特に若佐の人々には、大きな期待をかけたのは当然だったろう。
鉄道線路の道筋は、遠軽から西バロー、東バローを経て、千葉団体を通過して、四二号の沢に入り、武士（若佐）から、中佐呂間川口（浜佐呂間）えと、そうして網走、当時の佐呂間村の人の夢でした。
鉄道期成会の役員の記念写真が今も残っている。その写真の中の看板の文字に、「遠佐線佐呂間期成会事務所」と書かれている。

国鉄遠佐線の駅が、武士新市街に出来ていても、あの湧網線の末路の如くなったろうが、

遠佐線誘致運動期成会のメンバーと事務所

昭和二年に遠佐線が出来そうだとのことの、祝賀会をしたが、九年後に、中佐呂間までの西湧網線が開通している。

話を元の新市街に戻して、役場に、武士新市街の大正の中ごろの写真があった。
大正二年生れの矢吹俊治氏、現在も元の新市街地に在住、その矢吹氏の写真の説明では、一番向うの大きな二棟が小学校で、二棟を大廊下で繋いでいて、校長住宅が校舎に連なって建てられていた。学校の手前が名は忘れたが床屋、で次は、秋元利吉という人が、役場吏員中佐呂間に歩いて通っていた。たしか収入役していたと思うが、奥さんがタバコや一寸した雑貨物も売っていた。
真中の二階建ての家が、小川春吉という人が経営していた旅館であった。小川さんが旅館を止めたため柳橋勇吉という人が、医院を開業していた。
右端の方の建物は、水車での澱粉工場であったが、秋は忙がしいが、年間その水車で麦つきや、粉挽き等もしていた。
この写真は、武士橋が何回目か掛け替えられた記念写真でないのかな、市街を撮るなら、こんな写真でないはず」。
イラストは、役場に保存写真のトレス
語り手　矢吹俊治
文　責　徳永良行

座談会　平成二年一〇月一日　コミセン

佐呂間の開拓当時からの野性動物の獲り方

出席者　会長山内春芳・今日の世話役徳永良行・杉本磐・実盛雅夫・室井四郎・山口光友・矢吹俊治・宍戸清信・高田能夫

徳永

会長さん。今日こられる方がこれだけなのです。事務局の上伊沢さん急の用件ができて来られないことで、座談会を始めたいと思いますが、

会長山内

それでは皆さんお忙い中を、この野性動物を昔の人がどのようにして捕獲をして、食用や毛皮等の利用していたか等を、思い出して話して下さい。矢吹さん・宍戸さん・高田さんには、特に本日参加して下さったことに、お礼申し上げます。それでは徳永さん話を進めて下さい。

徳永

えーと、皆様に本日の座談会についての趣旨について、事務局の上伊沢さんの方からの手紙で、御承知のことであると思いますので、上伊沢さんが来られないので、私が司会役のようなことを致しますので、よろしくお願い致します。

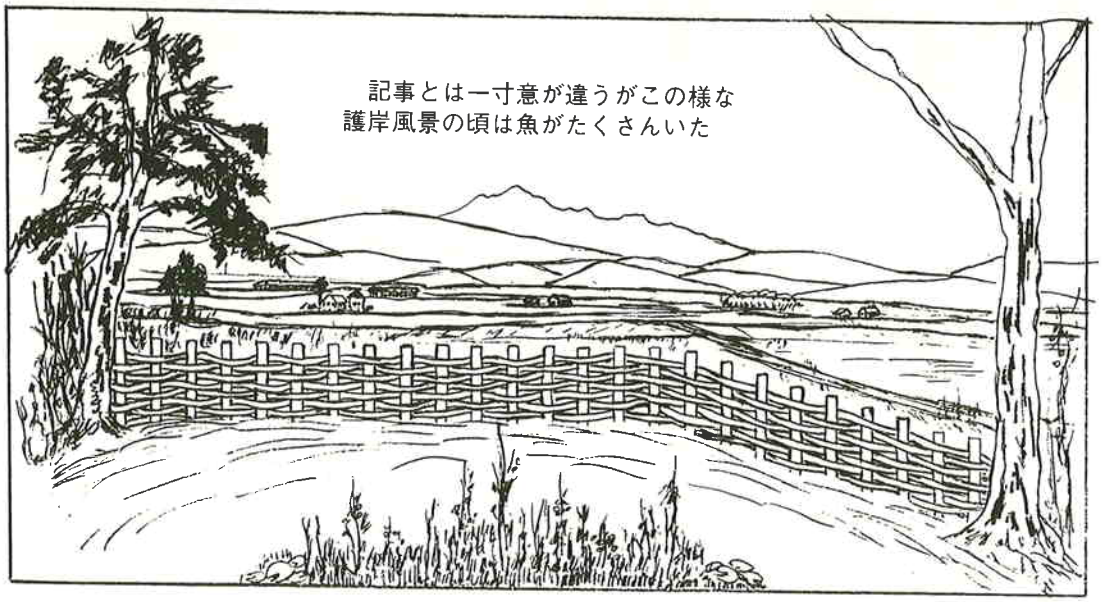
佐呂間町に開拓に、移住して来た先人の人々は、畠が出来ていない原始林の原野に入って来たとき、一日三度の食事は欠かせない人間の宿命、食べることの一番手っ取り早く手に入るのは、野性の動物・植物であったと思いますが、野生植物は、今でも、ふき・わらび・ぜんまい・茸・つくし・人によってはタンポポなど食べていますが、今日は動物だけに話を進めたいと思います。

室井

昔は、今のように野性動物捕獲について、現在のように、規制や、法律があったかなかったかは、私は研究していないが、開拓に入った当時は、野性動物も沢山いたし、人の栄養のための蛋白摂取のため色々な方法で獲っていたこと。私も親父から聞いた面白い話を持っていますが。

矢吹

最近は、川はブロックで固められ、昔のように川岸がうっ蒼とした柳の林も伐られ、生えたら又伐られるようなこ



とでは、魚も隠れるところもなくなったら、卵も生むところもなくなったね。

実盛

野鳥の獲り方に、色々面白い話があるが、あとで話をします。

宍戸

山兎も沢山いたがずい分少くなった。狐は昔は余り見かけなかったのに。近頃は何処にでも出て来る。野良犬より人間を恐れなくずうずうしいのにあきれるね。

山口

本当だ、市街の中や近辺を歩くのを見るが僕らの子供頃、狸・狐は殆ど見ていない魚なんか、子供の頃、若佐から中佐呂間に引越して来て判ったが、サロマ別川の下流の方と中流の方と、上流の方で、魚によって上流に行かないのもいたようだった。

杉本

そうだね。キュリなんかは仁倉で獲れた話があっても、佐呂間当りでは獲れた話がないからね。

高田

そうそう、キュリ、チカ、ゴリという種るいは、仁倉当りまでが限度だったようだね。

徳永

皆さんそれぞれ珍らしい話を持っているようですから、話の順序として、川魚の獲り方から話を伺うことにします。

昔の川及び川魚の獲り方

徳永

川がずい分ブロックで固められたね。さっき矢吹さんが話していたが、川魚の獲り方で何か話してもらいませうか。

矢吹

矢吹のところは、武士橋の側だから、サロマ別川では、かなり上流だろうね。

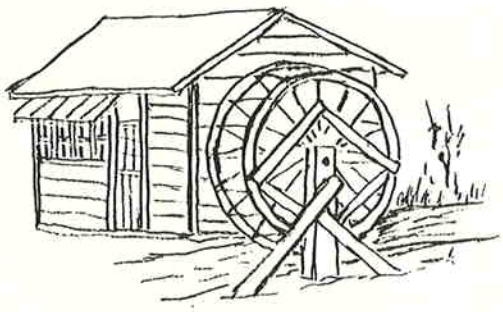
春早くに、上流に上ってくる赤腹は、大正の頃の群は大したもので、現在の若佐小学校の下の方に、水車で機械を動かす。オンコの木を原材料にした鉛材工場があったが、今の武士公民館の、七〇メートル位い下ったところから水路を掘って、風防林を横切って水を取って、水車を廻すのだが、水車のところに堰を作って落す水に、力を付ける仕掛のところに、春に上って来る赤腹が、大川から迷い込んで来てごっそりいた。水車にも影響があるから、水車の主が、近くの人達に獲りに来るよう頼んだら、農家の親父さん春の仕事の忙がしいのほったらかして、土橇を馬に引かせて、叺を積んで来て手摑みで赤腹を叺に入れて行く位いいた。

宍戸

矢吹さんより一〇才位い若いわしらの、子供の頃と言ったら昭和一桁ごろになるが、赤腹獲りのドウ（魚が入ったら出られない仕掛の篭）を使ってとる人があちこちにいた。自分で仕掛けないで、夜おそくこっそり他人が仕掛けたのを、かっぱらった話を自慢して言う人もいたが、魚が沢山いたからそんなこと出来たんだ。最近は、赤腹なんか若佐の方に来たという話はないね。

山口

夏になったら、投網で魚を獲る人がいた。どじょう。うぐい、桜鱒等が入っていることもあった。私のまだ若佐にいたころ、岡川さんという人や、山越さんという人らが、投網を使っていたの覚えている。あの付近の子供等はそれが面白いから、ぞろぞろついて行っ



て投網使うのを見たものだった。

宍戸

さっきのドウの話だが、赤腹やウグイ等位いの魚を獲るには、柳の細長い枝を集めて、人に寄って大きさはまちまちだが、大人の背丈程のものは見たことなかったが、縄とか針金で篭に編んで川の中に仕掛けるが、魚が上流に向って行くのを。玉石などを集めて並べて。一ヶ所に集まって上流に行かないようにして。そこにドウを仕掛けるのだが、あんなことにも上手下手があった。

矢吹

秋になって、アキアジ（鮭）も大型のドウで獲る人もいたが、アキアジは箝（ヤス）で突いて、上手に獲る人がいたが、河川監視がうるさくなって、ドウを仕掛けられなくなったから、箝ばかり使う人が多くなった。何しろ、大正の二年生れの私は、大正時代が少年時代だから、私の子供のころの、サロマ別川といったら魚はいくらでもいた。

ある年の秋、川の水の少いときだった。上って来るアキアジが、水の浅い処を集団で来るから、岸辺の砂原に押し上げられたりしたの。鉈でもって、頭をなぐって殺して摑かまえたこともあった。何しろあの大きいアキアジは生きたままなど、摑んで持ち運ばれないからね。

山口

春の赤腹、秋のアキアジのシーズン以外でも、ウナギヤツメの大きいのがよく春ごろ上って来たが、その外にウグイ・ドジョ・丸ガニ・エビ・いくらでもいて、エビの沢山いるところでは、二人して手拭を両手で四すみを持って川の中で掬って遊んだこともあった。

それから鴉貝もよく手摑みで獲ったね。丸ガニを手で摑んだ思い出もある。

実盛

川の丸ガニについてだが、あれは旨いものだったよ。沢山獲れた大正のころから、昭和の始めころよく喰べた。皮や甲羅・腹わたにふんどし・爪を取って、身だけを擂りつぶし、米糠の新しい良いところを、粉ふるいで取って、それを練り混ぜて団子にして、茹でて食べると旨かった。又味噌汁の中に入れても旨かった。砂糖醤油つけて焼いても旨いものだった。

川カニは場所によって沢山獲れるところがあった。

徳永

段々面白い珍らしい話が出て来ましたね。

室井

今実盛さんが、川ガニの食べ方で面白い話でしたね。川エビの獲り方について面白い方法があるんですよ。

（注、後で原稿にしたのを「仁倉のエビ漁の話」と題して届けられたのを、この項目の最後に掲げることにして、室井氏の話は、重複を避けるため、ここで省きます）。

徳永

室井さんの話、エビ漁のこと、私は全く珍らしく聞きました。

杉本

昔は子供達が、三人か四人位い集まると「おい川え魚獲りに行べ」と誰かが言い出すと、誰かの家に子供が魚を掬う網があったから、柳の枝が茂って、沢山垂れ下っているようなところで、一人が網を持って、川上に向って待機したら、あとの子供が、二人でも三人でも川上から横に並んで、足でじゃぶじゃぶさせながら魚を網の方に追い付けたら、あのころなら簡単によく魚が網に入った。春から秋までの間に、時たま魚掬いもつりより面白ときがあった。そんなことで獲る魚は小魚ばっかりだったが

高田

そうだね、ドジョウだの、頭のでかいドンコカジカや、ユグイ、エビも等だったね

ドジョウに二種類あって、川水の奇麗なところのドジョウと、土のどろどろしたところのドジョウは、一寸ウナギに似たようなのであったね。ザリガニも網の中によく入ったね。

杉本

市街に暮らしていた私らは、子供のころの遊びで、友達と川魚獲りに行った場合。ザリガニは、網の中よりバケツに入れるとき殆ど投げた

徳永

私らは農家で鶏飼っていたから、ザリガニも頭のでかい骨ばかりのドンコを、鶏の餌にするのに持って帰ったもんだった。

私は、若佐で子供頃過ごしたので、チカとかキュリが川で獲れるとか聞いたが、見たことがなかったね。

室井

私は仁倉で育ったので、チカ・キュリのことはよく判っているが、チカ・キュリは、サロマ湖から産卵のために上って来ても、仁倉当りが限度かな、五月中旬ごろ盛んに上って来るが、チカの孵化場が仁倉に戦前に出来ていて、戦後も少ししばらくの間あった。

高田

チカやキュリのシーズンになったら、浜佐呂間の人や仁倉の人達ばかりが獲ったのでなく、上流の、佐呂間若佐の方からも、獲りに来ていたよ、

徳永

子供のころウナギのでかいのが、よく水田の中に入って来たが、水の浅い水田では手摑み出来たが、今ウナギは大川に上って来るのだろうか、

室井

知来の一五号のところに、仁倉地域に水田の水を送るための、頭首口（とうしゅこう）を昭和三〇年頃造ってからは、ヤツメウナギや赤腹は、毎年春には、そこで止められるから、それより上流の人の、物好きな人達は、わざわざそこまで来て獲っている人が毎年かなりいた。

矢吹

桜鱒も私の子供頃はよく上って来た。アキアジにしても普通の鱒にしても、鴉が野原で喰っていることがあった。人から聞いたが、狐が川でアキアジや鱒を獲って、川から離れたところに引きずって行って。喰い残したのを鴉が見つけて喰っているのだと

室井

仁倉当りでは、よくそんな風景があったね。アキアジの一匹だったら、狐の胃袋には入り切れないだろうからね。

実盛

カラス貝もよくいたが、大正の頃だったら二〇センチ位いの大きいのがいたが、今は絶滅したのでないかな。

川カニは旨かったが、カラス貝は旨いものではなかった。喰べれば喰べれたが

杉本

旨くないと言えば、ヤチユグイよ、ヤチ臭い奴だった。背中が青

蛇籠による護岸工事完了現場の図

サロマ別川知来23号付近
（昭和10年代）

っぽい魚だった。

徳永

八目（ヤツメ）っていうのがいたが、細長い小さいのが何匹も固まって、ぐにゃぐにゃとしていたよく見かけたが、昭和の始めごろは子供だったころもよく見たが、戦後尚和の開拓に入ったころあの尚和の川の上流でも見かけた。

尚和の川で言えば、ヤマベがいたが北海道の至るところの川にいるとは聞いたが、桜マスの雄だとか、桜マスの雌は海に下って成長して上って来ると言われているが、

戦後の開拓営農に追われどうしであった私は、魚釣りどころでなかったが、終戦後は、ずい分日曜日など大勢の人が、尚和の沢に来てヤマベ釣りしていたね。

室井

ああ、昔は、ヤマベは、沢に入った川には何処にもいたね。

それから魚について、どうしても記録しておきたいのがイトウという魚だね。あれは可成り大きい魚で、肉食だものだから、気の荒い魚だった。

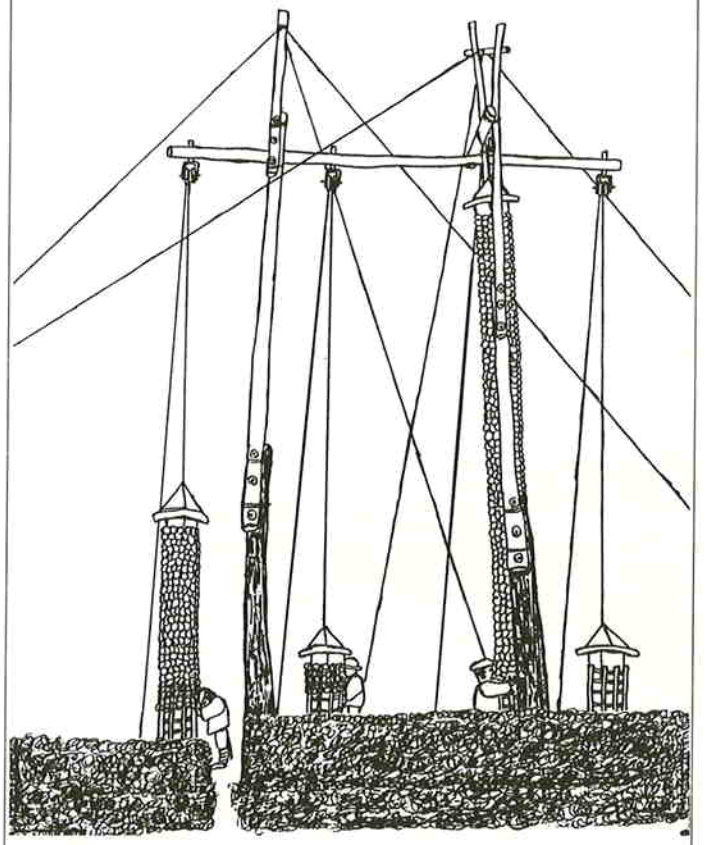
仁倉付近で、第二次大戦の終った後、昭和二〇年代半ば頃だった、一寸何年と言えないが、あのとき獲ったイトウは、一メートル位いより大きかった。このイトウより昔は大きいイトウは、開拓当時の人達は獲ったり見たりしていたのでないかと思います

徳永

皆さん今日は、佐呂間別川のことや、川魚の珍らしい話を色々と話されましたことを、「さろまむかしむかし」の本に残すため、後世の人に、読んでもらって、いくらかでも昔の佐呂間の川のことが判ってくれること願って、次の課題の「野性獣類の獲り方」に移りますが、室井さんの話の「仁倉川のエビ漁の話」を省きましたので、後で届けられた原稿をそのまま次に掲載して、「野性獣類の獲り方」の座談会を掲載して行きます。

文責　徳永良行

蛇籠　編む作業風景
（河川の護岸工事に使った金網）
昭和20年依然戦前はこのようなものを使って河川を守った。
（佐呂間の坂本建設㈱坂本市太郎社長語る）



坂本建設 KK 社長坂本市太郎提供写真トレス

仁倉川のエビ漁の話

仁倉地区に和人が来住して開拓が始まったのは、明治三六年である。その頃の仁倉川は、どれが本流なのか判らないぐらい、沢の中を幾本にも岐れて流れ、サロマ別川に合流する近くになって暫く一本になり流れていた。

然し、地味が肥沃であったので、次々と人々が来住して開拓が進み、川も纏められて大正の始め頃には、現在の川筋に成りました。

その頃は、水も多く深い処には、一メートル以上もある「いとう」、「赤腹」、「あめます」など、沢山の魚がいたのです。

然しながら、仁倉川は急流なため、上流から大雨の度に砂利を運び、昭和の始め頃には、川が浅くなり、子供たちがズボンを捲くって、川遊びが出来るようになってしまった、と或る夏の日、その浅くなった川の岸辺を、もそもそと草の根などに頼るようにして　這いながら、四ー六センチメートルのエビが列になって川を遡っているのです。よく見るとその列は延々と続き、大川から数百メートルも続いているのだ。

そこで年寄の知恵なのか、或いは内地での経験なのか、厚さ一センチ程の薄い板で縦横三〇センチ、長さ一メートル五〇センチ程の箱樋を造り、その片方の口に金網を張ったエビ捕りの道具を造り、川の片方の岸にこの箱樋を流れないように据え付け、箱樋の内側から下流斜めに対岸え藁縄をピンと張る、これで装置の出来上がりだ。

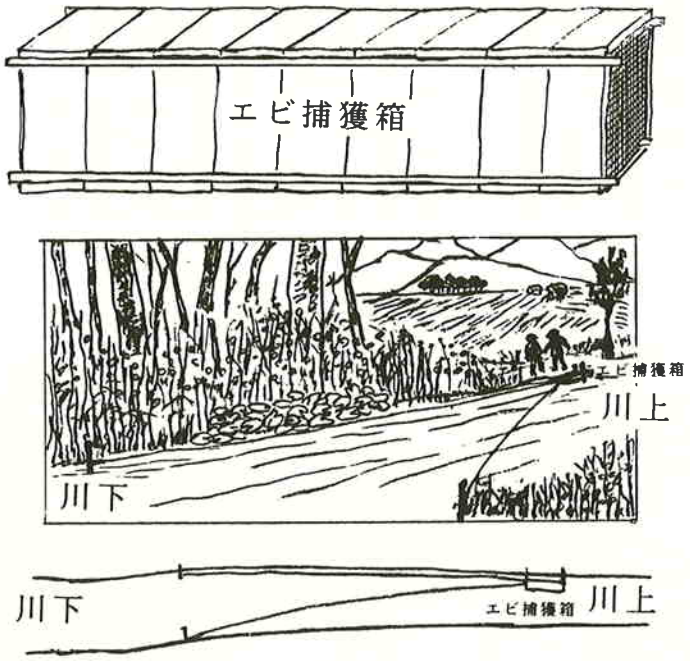
岸を這って遡って来たエビは藁縄に騙され皆こちらえ誘導されて箱樋の中へ這入ってしまうのだ。

親爺は農作業が忙がしいので、装置を仕掛けた後は、子供が番をする。面白くて楽しかった思い出が忘れられない。

然しこのエビも何時とわなしに、姿を見せなくなって久しい。

文責　室井　四郎

仁倉のエビ漁昭和初期の体験
向こう岸を流れに遡るエビこちらの
岸のエビを縄１本でこちらの岸に仕
掛けた捕獲箱に誘い込むの絵である。



両岸のエビ捕獲箱に誘い込むの図